

令和7年度 病害虫防除技術情報 第9号

令和7年12月22日
大分県農林水産研究指導センター
農業研究部

イチゴにおけるうどんこ病の防除について

令和7年12月中旬に実施した巡回調査では、発生圃場率、平均発病株率、平均発病葉率および平均発病果率は平年を上回っています（図1、図2）。

本病は気温20°C程度が最も発病しやすく、九州北部地方の向こう1ヶ月の予報（12月18日福岡管区気象台発表）によると、平均気温は平年並30%、高い確率50%と、被害拡大の懸念があります。

圃場内の観察を徹底し、早期発見に努めて速やかに防除を実施してください。

1. 発生の状況

12月中旬に実施した巡回調査結果

発生圃場率※	： 40.0% (平年： 12.2%、前年： 10.0%)
平均発病株率	： 4.8% (平年： 1.8%、前年： 0.4%)
平均発病葉率	： 1.1% (平年： 0.5%、前年： 0.1%)
平均発病果率	： 0.4% (平年： 0.2%、前年： 0%)

※発生圃場率は発病葉率より算出

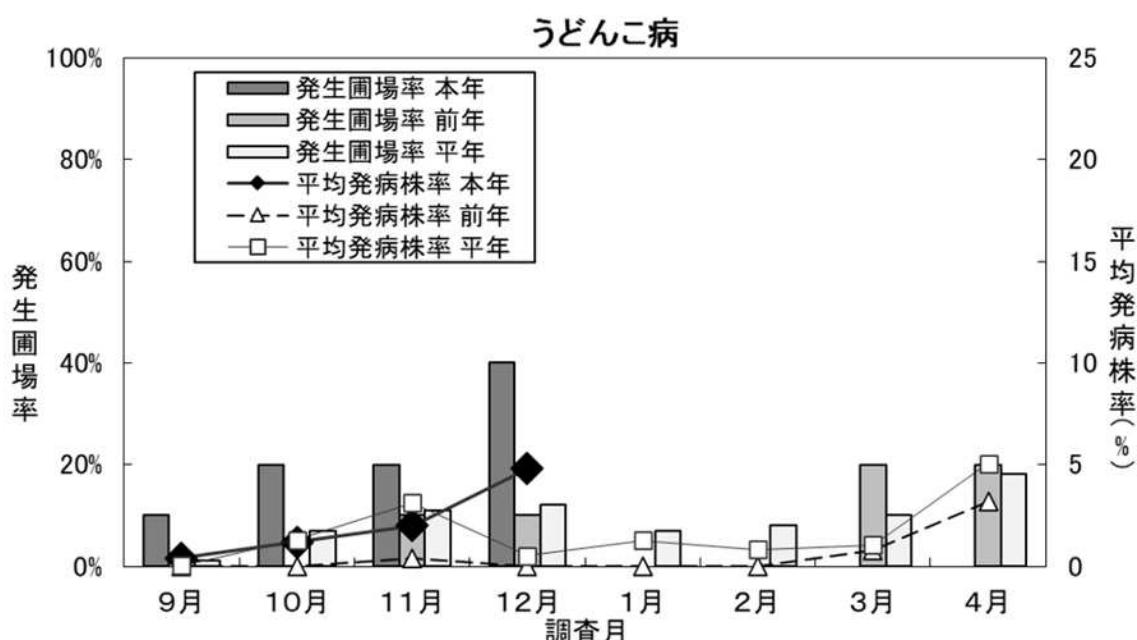


図1 発生予察巡回調査（イチゴ）におけるうどんこ病の発生状況
(発生圃場率、平均発病株率)

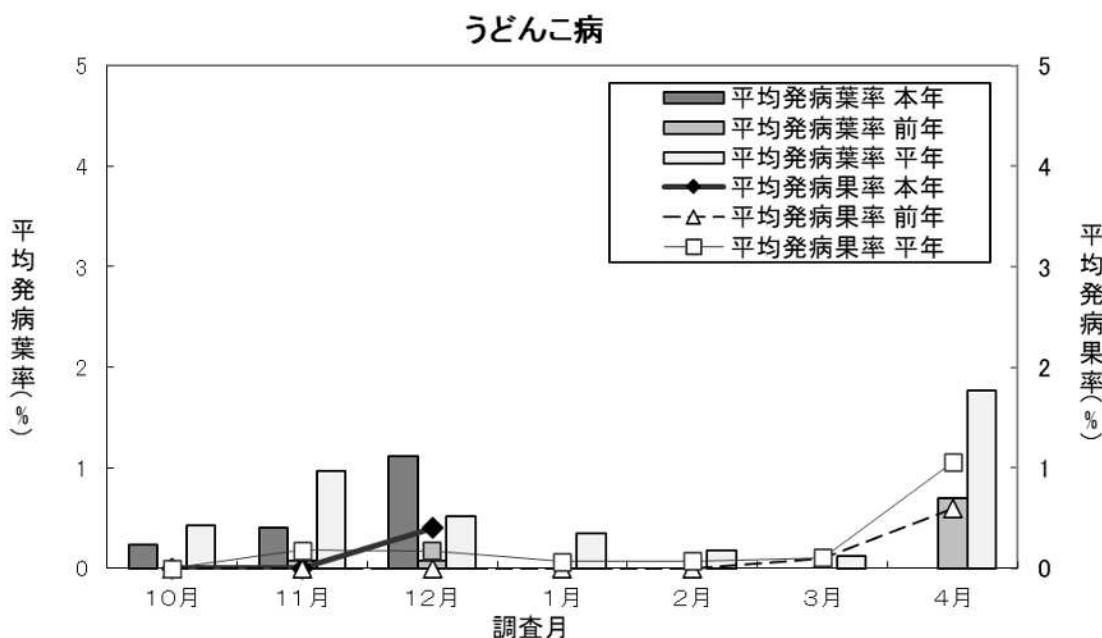


図2 発生予察巡回調査（イチゴ）におけるうどんこ病の発生状況
(平均発病葉率、平均発病果率)

2. 防除上の注意事項

- (1) ハウス内の菌密度が高いほど発病しやすくなるので、発病果や発病葉は見つけ次第ハウス外に持ち出し、土中に埋める等の処分を行う。
- (2) 草勢の低下により発病が助長され、乾燥条件で被害が拡大しやすいので、適切な肥培および灌水管理に努める。
- (3) 本病は、発病後の進展が早く、防除遅れが生じやすいため、発病初期のうちに治療効果の高い剤を中心に、散布間隔を短くする等して集中的に散布する。
- (4) 同一系統薬剤を連続使用すると耐性菌を生じやすいため、系統の異なる薬剤とのローテーション使用を心がける。ただし、炭酸水素化合物を薬効成分とする薬剤（カリグリーン、ハーモメイト水溶剤、ジーファイン水和剤等）は連用による耐性菌の出現は確認されていない。

ホームページアドレス
<https://www.pref.oita.jp/site/oita-boujosh/>

